

文学部 英語英米文学科 総合型選抜 I 期 入学試験

小論文作成のヒント

1. 形式は自由

以下のどちらの形式でもかまいません。

パターン (1) :

「問題提起 --> 原因分析 --> 解決策」というかたちで、資料を読み、問題を見つけ、それを分析し、自分なりの解決策を考える。

パターン (2) :

「テーマ・話題紹介 --> 詳細説明・事例提示・問題指摘・考察・感想(など) --> まとめ」というかたちで、ひとつのテーマについて比較的自由に記述・論述する。「考察・感想」の部分がもっとも重要。

2. 構成はあまり難しく考えない

序論	-->	本論	-->	結論		
問題提起	-->	意見	-->	展開	-->	結論
導入	-->	概要説明	-->	深く鋭い考察	-->	まとめ

……などという参考書の説明は難しく見えますが、例えば次のように、もう少しゆるやかに構成を考えてみてください。

最初の 1 段落 :	扱うテーマ・題材・問題を <u>紹介する</u> 。
本論 (2~4 段落) :	そのテーマ・題材・問題について <u>調べ・考え・感じたことを書く</u> 。
最後の 1 段落 :	<u>自分なりの発見・意見</u> (最初の段落にない情報) をまとめる。

3. 評価基準 (例)

およそ次のような観点で評価します。

導入・本論・まとめ、などという構成は整っているか
資料を使った場合、丸写しになっていないか
自分が考えたこと・感じたことを述べているか (← **これがもっとも重要です**)
文・段落・小論文全体が、言いたいことを適切に表現できる長さで書かれているか
書式*や言葉づかい**は正確か

* 段落のはじめは 1 文字空ける、行のはじめに句読点を置かない、など。

** 文体は、「です・ます」調・「である」調のどちらでもかまいません。

4. 本論を充実させる

本論の各段落には 4～5 文を書いてください。

トピック・センテンス：この段落で言いたいことを 1 文で表現する。

詳細 1

詳細 2

(詳細 3・詳細 4……)

まとめ：トピック・センテンスを発展させて段落を締めくくる。

次のページからのサンプルを参考にしてください。

(あくまで教員が書いたサンプルで、どちらかといえば小論文より作文に近いものですが、このような形式でもかまいません。受験生のみなさんは、自分自身の関心に従って取り組んでください。)

サンプル1（導入から本論の途中まで）

私は絵が好きでしばしば美術館に行くので、ピカソ、ゴッホなど、有名な画家の絵についてはある程度知っています。が、ピカソはスペイン人、ゴッホはオランダ人で、イギリスの芸術家は誰も頭に浮かびません。だからこの小論文では、イギリスの美術・芸術について調べ、また考えてみたいと思います。[以上、導入]

イギリスでは、18世紀からウィリアム・ホガースという画家たちが自国の芸術の確立を目指していたようですが、私が興味を惹かれたのは19世紀のラファエル前派と呼ばれるグループです。メンバーは、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、ジョン・エヴァレット・ミレー、ウィリアム・ホルマン・ハントなどという画家たちでした。彼らは、ヨーロッパ美術の規範とされてきたルネサンス画家のラファエロより前の時代の素朴な絵画を理想と考えたようで、「ラファエル前派」という名前もそのような立場を表しています。また彼らは、聖書中の挿話やシェイクスピアの劇などの場面を絵に描きました。『ハムレット』の一場面を描くミレーの『オフィーリア』が代表的なようで、これは私も見たことがある絵です。素朴な自然と、悲しく美しい姿の女性のコントラストがとても刺激的で、テレビなどのない時代には、このような絵でドラマティックに物語を伝えたんだ、と思いました。

[以下、さらに2~3段落の本論と、まとめの段落が続く]

参考文献：下楠昌哉編『イギリス文化入門』

サンプル2（導入から本論の途中まで）

私は、幼い頃にルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』を読んだことがあり、アメリカの小説と文化に興味をもちました。この物語の原題は、*Little Women* というそうで、アメリカ東部のニューイングランド地方が舞台となっており、メグ、ジョー、ベス、エイミーという四人の姉妹の物語です。[以上、導入]

第一に私が関心をもったのは、四人の姉妹が様々な出来事に出会いながら成長していくことですが、中でも、戦争に行った父の言葉を忠実に守ろうとすることです。父親は、この四人の姉妹に書いた手紙の中で、母によく仕え、自分の務めを忠実に果たし、心の敵と勇敢に闘い、自分自身に打ち勝つようにと言います。これらのことは、現在の私にとっては、父親が娘に望む言葉としてとても厳しい教えのように見えます。しかし、アメリカのニューイングランド地方は、思想的に厳格な地域であるそうなので、その考え方が表されているのかもしれませんが、また、当時の男性が理想とする女性像だったのかな、とも思いました。

第二に、私は、特に次女のジョーの生き方に関心をもちました……

[以下、さらに2～3段落の本論と、まとめの段落が続く]

参考文献：L. M. オールコット『若草物語』矢川澄子訳

師岡愛子『ルイザ・メイ・オルコット：「若草物語」への道』

[導入の1段落がここに]

ブレイディみかこの『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』のなかでテーマとなっているのは、現代社会における「多様性」の意義です。この本の主人公は、日本人である筆者とアイルランド系の父親の家庭に生まれた「息子」です。人種的に多様な名門のカトリック小学校から生徒のほとんどが白人である中学校に進学した「息子」の日常生活からは、人種差別・貧困・LGBTQ への偏見・家庭崩壊・EU 離脱など、現代イギリス社会が抱えている諸問題が浮かび上がってきます。「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだ」と言う筆者に見守られながら、「息子」は少しずつ「多様性」の意味を学びます。

私がこの本を読んで特に考えさせられたのは、筆者の言葉を借りれば、「地べたの相互扶助の精神」です。大雪が降ったときに、筆者の近所に住む人々が自発的にボランティア活動を行い……

[以下、さらに1~2段落の本論と、まとめの段落が続く]

参考文献：ブレイディみかこ 『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

この小論文において、私は英語を学ぶということについて、自分の経験や21世紀の世界情勢を踏まえて考えてみたいと思います。コロナ禍や、ロシアのウクライナ侵攻など、世界的に激動している今、人と人のコミュニケーションがどれほど重要か、あらためて思い出すべきだと考えたからです。[以上、導入部]

私は、高校時代にアメリカのニューヨークでホームステイをしたことがあります。初めは、英語を話すことも聞き取ることもできず、ホームステイ先の家族とうまくコミュニケーションをとることができませんでした。少しずつ英語がわかるようになってくると英語を話すことが楽しくなってきました。そして、相手とコミュニケーションをとるためには、言葉の土台となっているその国の文化を知ることが大切だということに気がつきました。その時から、より深く英語圏の社会について勉強したいと思うようになりました。

フェリスのホームページを見ますと、語学教育の目的として「国境にとられない視野と発想を持ち、世界中の人々と心を通わせるために」語学を学ぶことが大切、と書かれています……

[以下、さらに2～3段落の本論と、まとめの段落が続く]

参考資料：フェリス女学院大学ホームページ 「語学科目」